



事例紹介

3

●普通鉄道業、道路旅客運送業、卸売・小売業、不動産業、飲食店

さん ぎ  
**三岐鉄道株式会社**

所在地：三重県四日市市富田3-22-83

資本金：4億円

障害者雇用状況：常勤3名（うち重度1名）、非常勤1名（重度）



# 地域社会とともに歩む ローカル鉄道会社 障害者雇用でも地域に貢献



## 地域住民の貴重な足

三岐鉄道株式会社は、三重県内に営業エリアを持つ鉄道会社。いわゆるローカル鉄道で、地域にとって不可欠な存在であるとともに、鉄道ファンからは高い人気を得ている路線です。そのローカル性から、同社は地域に密着した経営を推し進めています。

三岐線は昭和6年に営業開始。旅客輸送のほか、藤原町にあるセメント工場で生産される製品等の貨物輸送も行い、鉄道収入の約50%を占めています。北勢線は、近畿日本鉄道が大正3年から営業している路線でしたが、平成13年に経営改善のために廃止を発表。その後の存続運動を受けて、平成15年4月から営業譲渡により、同社が運行している路線です。地域の貴重な足として通勤・通学などに利用されていて、苦しい経営ながら沿線市町の協力を得て、活性化に向けたさまざまな取り組みを行っています。

## プロフィール



**川瀬 寛（かわせひろし）さん**

昭和18年生まれ 62歳  
右上肢障害（3級）

川瀬さんは5年前の事故で右手首を切断。以来、右手指が動きません。「働く場を得られたことに感謝し、少しでも長い間、勤められるよう頑張ります」。平成17年2月入社。



**水谷 省三（みずたにしょうぞう）さん**

昭和28年生まれ 52歳  
心臓機能障害（3級）

心臓バイパス手術という大手術から社会復帰した水谷さん。「体に気を配りながらですが、以前と同じように働けるようになったことに喜びを感じています」。平成15年2月入社。



## 「ありがとう」を感じる仕事の喜び

北勢線の活性化施策の一環として、平成17年3月に星川駅（桑名市）が開業。その星川駅で駅員として働いているのが、川瀬寛さんです。川瀬さんは鉄道以外の業種で長年仕事をしてきましたが、5年前の事故で右手首を切断。以来、右手指が動かなくなりました。1年ほどで職場に復帰することができましたが、その後、会社都合による全員解雇という辛い体験をしました。再就職を探すにも多くの苦労がしのべられますが、幸い縁あって平成17年2月に三岐鉄道に入社することができました。

「慣れない鉄道業ですが、他の社員の協力を得ながら、一生懸命務めさせていただいています。働く場を見つけれられたことは、本当にありがたいことだと思っています」という川瀬さん。

北勢線は、ほぼ全駅が自動改札化されており、川瀬さんは勤務の際、星川駅での業務を一人で担っています。時間は6時30分～10時、15時～20時30分という利用客の多い時間帯で、星川駅の乗降客数は1日当たり700～800人程度。自動券売機はありますが、定期券の発行や、券売機が苦手なお年寄りなどへの対応といった窓口業務と、ホーム発着時の安全確認などが主な仕事の内容です。

「昨年、星川の名前にちなんで企画した七夕イベントでは、予想以上の反響がありました。お客様に『ありがとう』とっていただけたときは、いつも仕事の喜びを感じます」と、目を輝かせる川瀬さんです。



## 大手術から復帰、培った技術を活かして

鉄道利用者には目の届かない裏方で仕事をしている障害者もいます。四日市市にある同社施設区の副長、水谷省三さんです。水谷さんは鉄道関連の他社で仕事をしていたが、5年前に心臓病バイパス手術という大きな手術を経験。その結果、障害の認定を受け、病状回復後、平成15年に同社に入社しました。手術後の経過は良好で、



時刻表を怠りなく確認し、いつも電車の到着時間を頭に入れておく。ノートパソコンは、定期券の発行業務に使用するもの。

電車が来るたびに、お客様の安全な乗り降りを確認する川瀬さん。

後輩社員とともに、線路の補修に使うワイヤーロープを準備する水谷さん。



現在は5週に1度、検査のために通院するだけです。

「おかげさまで特に勤務に支障があるわけでもなく、ですから私自身はあまり障害という意識を持っていません」と語る水谷さんですが、まさに自身の節制・努力の賜物です。

仕事の内容は、鉄道施設の保守・点検です。

「以前は同じ仕事ですが、請負で仕事をする立場でした。するとやはり無理を重ねてしまうことが多く、そんなことも病気の原因の一つになったのかもしれませんが。現在は違う立場で仕事ができるようになったことも、ありがたいことです」と、健康に気を遣いながら、培ってきた技術を生かせる仕事に就けたことに、生きがいを感じる水谷さんです。



## 地域とのつながりを大切に

同社で働く常用雇用の障害者は現在、他に2名。また、短時間雇用の障害者が1名います。

「最近の新規雇用の方は、みなさん縁故による採用です。鉄道会社として、地域とのつながりを大切にしたいという思いから、自然とそうなった結果です」というのは、同社総務部総務課長兼労務課長の渡辺一陽さんです。

障害者雇用の面でも地域への貢献を果たしてきた同社。今後は、除外率の引き下げと廃止に対応して、さらなる雇用の拡大を図っていく考えだということです。「鉄道会社としては決して大きくない当社では、多くの人がいろいろな仕事を兼務しているのが実情です。そのようななかで、障害者が働く場をどのように確保していくかが課題です」（渡辺さん）。同社の今後の取り組みが期待されるようです。

## 職場から



**今後、障害者の雇用拡大が必要  
小規模鉄道会社として  
雇用の場をどう確保するかが課題**

三岐鉄道株式会社 総務部  
総務課長兼労務課長  
渡辺 一陽（わたなべいちよう）さん

最近の障害者の方々の採用は、今のところすべて縁故によるものです。ですから、採用に当たって支援機関の援助を受けるといった制度の利用はありません。従来の除外率の基準では、私どもは障害者雇用納付金制度による報奨金をいただける立場でしたが、今後はそうではなくなっていきます。金銭的なことよりも、企業としての社会的責任を果たすために、今後、さらに障害者の雇用を拡大していきたいと考えています。しかし当社のような小規模な鉄道会社では、例えば私自身が総務と労務を兼務しているように、従業員一人ひとりが複数の業務をこなさなければならないケースが多くあります。そのなかで、どのように雇用の場を確保していくかが課題だと思っています。